社会福祉法人
八ヶ岳名水会
YATSUGATAKE MEISUIKAI

社会福祉法人 八ヶ岳名水会 情報紙

虹いろ

Line Up

- 八ヶ岳名水会 新理事ご挨拶
- つなぐたゆたう アート展を終えて
- ブリッジスクール
- 利用者さんの充実した 生活を目指して
- 強度行動障害支援者 養成研修報告

その他

題字：三井 とし子 様
写真：飯野 恵 様

19

平成28年（2016）
12月発行 19号

八ヶ岳名水会　新理事　ご挨拶

社会福祉法人　八ヶ岳名水会
新理事　片桐　公彦

八ヶ岳名水会の理事を仰せつかっております片桐公彦（かたぎり　きみひこ）と申します。

山梨県、そして八ヶ岳名水会とのつながりは結構古く、学生時代には小淵沢近くで先輩たちが始めたプライベートキャンプ場づくりのお手伝いなどで足繁く通っておりました。

八ヶ岳名水会とのつながりでいえば様々な研修などでご一緒することも多く、諸先輩方から様々な御指南を受けていました。

八ヶ岳名水会に限らず、多くの法人は障害のある方々の高齢化や重度化に直面しています。国全体の財政が厳しさを増す中、法人の経営的なハンドリングは今後益々、慎重かつ難易度の高い判断が求められ、さらに時代の要請に対し素早く、強い決断が迫られます。

こうした二律背反する意思決定をしなければならない時代に、この法人の役員として関わらせていただくのも運命的なものだと感じています。未熟者ではありますが、精一杯頑張りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

社会福祉法人　八ヶ岳名水会
新理事　北岡　賢剛

これまで、小泉さんと楽しいお付き合いをさせて頂いていたことがご縁で、この度、理事として八ヶ岳名水会の運営に参加することになりました。どうぞ宜しくお願い致します。

この業界で仕事をするようになって、30年になります。措置制度の時代から、支援費制度、自立支援法、総合支援法と、これまで時代の変化を楽しんできました。入所施設での暮らしが中心であった時代から、地域での暮らしが主流になってきました。これからは、地域で暮らすために必要なサービスのメニューは整い、このメニューを使いながら、市民としての暮らしの豊かさを追求していくことになります。このことは、同時に多様な個性を持つ障害がある人達を支える私たちにも、専門性（技術・知識）が求められていくことになります。なかなか厳しい時代です。

そして、障害があるからこそ生み出される表現物（絵画、陶芸、パフォーマンス等）にも注目し、その才能が大切にされる環境を整えていくことができたら、その事は素敵なことですね。理事として、楽しい職場になるように頑張ります！

社会福祉法人　八ヶ岳名水会
新理事　鈴木　博義

四年に一度のリオ・オリンピック、パラリンピックが開催され、日夜多くの感動を頂いております。特に、障害を持ったアスリートの競技に臨む姿は、感動の一言に尽きます。

さて、この度の人事により当法人の理事に就任いたしました、鈴木でございます。

歴史ある当法人の理事への就任は光栄と同時に、重い責任を頂いた感がございます。

過去約10年、当法人の監査役を経験させていただく中で、飛躍的に活動範囲が拡充、充実され県下におかれましても、有数の法人に成長する姿を見てまいりました。

これらの経緯の中で、これからは拡大から安定に、山梨県に於ける社会福祉法人のひな形となる経営内容の充実、地域社会・職員から頼られ・惚れられる法人作り、が求められていると思っております。

中でも理事会へのけん制機能を有すること

が期待されている、評議員の機能が極めて重要と考えています。

今後、理事会で審議する重要事項については、原則としてあらかじめ評議員の意見を聞き、法人経営に直接携わる理事とは異なる立場から、意見を頂くことが、より重要になってくると考えております。

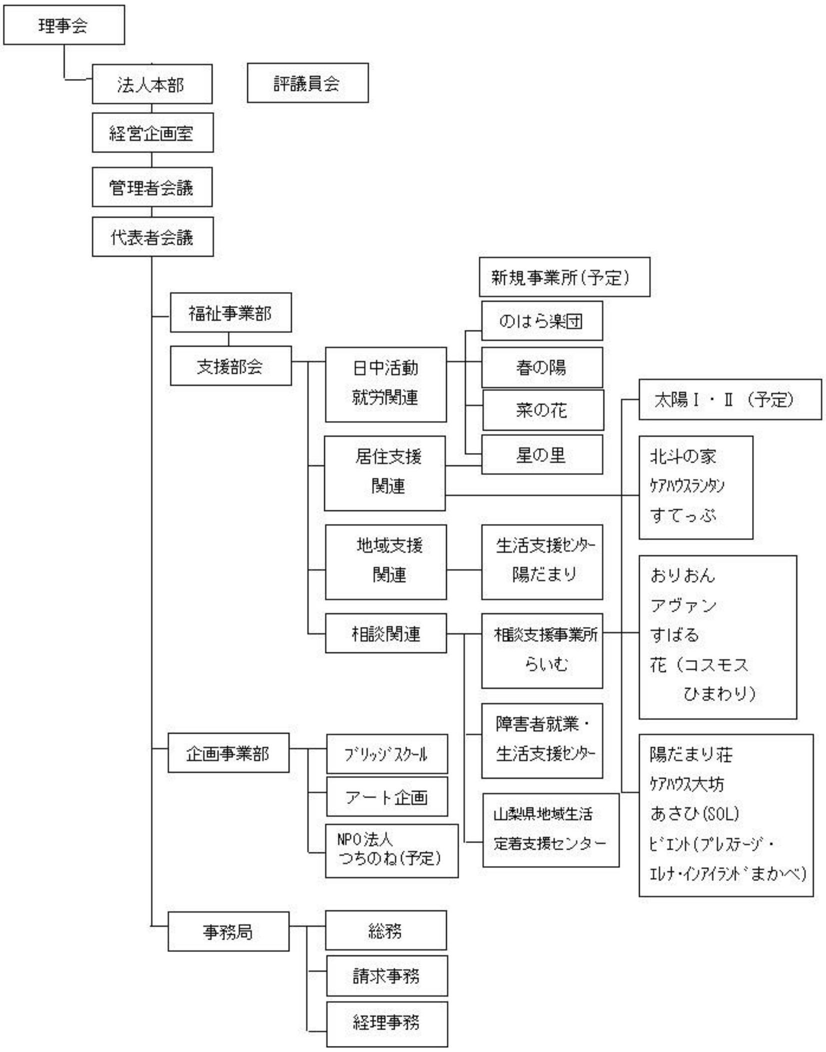
新しい角度から当法人が『惚れられ・惚れ込んで働ける』企業体となれるよう、微力ではありますが参画していきたいと思っています。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

八ヶ岳名水会　役員名簿

理事長	坂本ちづ子		
理事（６名）	片桐公彦 北岡賢剛 小泉晃彦 鈴木博義 中嶋浩	評議員（１３名）	相澤泰 市原実 木村輝三 小池光夫 小林元久 駒井康 里見達也 清水健雄 須田晶子 樋口誠 古屋克己 堀内一明 矢ケ崎真知子
監事（２名）	手塚邦彦 中井俊機		
職員	２４１名		

八ケ岳名水会　組織図



つなぐたゆたう
アート展を終えて

展で聴こえてきたことやものたち

みんなの村から生まれた雫の形、
土から生まれた有機な美味しいもの、
様々な価値を含んだ美しいもの、
既成の価値から解き放たれた豊かな生活の宝物がありました。

訪れた人たちが物を作ったり、
ダンスをしたり、
作品の中に入り込んだり、
「そうそう」とうなずくささやかな声もありました。
輝く小さな眼や、思わず触ろうとする小さな手がありました。
キュウリはみんなの体の細胞に再生されたでしょうか？
びっくりした作品に影響されて、思わず描いてしまったでしょうか？
耳を澄ませば展のささやきが、まだ聴こえて来ます。

北村雅子

「つなぐたゆたうアート展～はなたれ村の夏まつり～」が2016年7月9日(土)～7月15日(金)に甲府駅北口にある山梨県立図書館で開催されました。52人の作家の展示・いろんな施設でつくられた「守り神」の展示・9種類のワークショップ・オープニングイベントのライブ・つくった歌詞を綴る縁故節を歌う「こうふのまちの盆踊り大会」・ギャラリートーク・ミュージアムショップ・ダンボールハウス・・と盛りだくさんな華やかな1週間となりました。なんと入場者数は推定1500名に！

今回つなぐたゆたうアート展を創るにあたっては、昨年8月から「つなぐたゆたうアート会議」という誰でも参加できる「場」をつくり、毎月第一木曜日に、施設関係者も施設と関係ない方も、多種多様なバックグラウンドの方が、話し合いながら、企画やアート展の名前を決めるところから、みんなで準備してつくってきました。参加者が多ければ、十人十色の意見や価値観があり、アイデアを形にするには時間がかかりました。例えば、「はなたれ村の夏まつり」というサブタイトルを創るとき〝はなたれ〟の意味について1時間半にわたる議論が交わされました。障害やアートに対するイメージや考えについて、真剣に話し合い、お互いの価値観を知る貴重な機会となりました。その結果、たどり着いた答えは、いろんなモノ・コト・ヒトを放つという意味で〝はなたれ〟る村をつくることでした。そして、作る人も見る人も参加する人も「ウレシイ・楽しい」アート展にしようという最終目的となりました。

会場では、白い壁の中に額付きの展示や、ダンボール柱やダンボールハウスなど身近な素材による展示、デザインされたアクリルケースの中にフードフィギュアが美しく並べてあったり、いろんな方法で展示されました。さらに、期間中に描いたり、踊ったり、織ったりするワークショップがいろいろあり、

常に空間や観るものが変化して、会場がまるで生き物のように進化していきました。そこに飾られた自由自在に描かれた作品たちから、あふれだす生きるエネルギー。そこには、何が〝いいか、悪いか〟〝正しいか、間違いか〟〝上、下〟という価値観はなく、作品たちから「あなたのありのままが素敵だよー」という声がいっぱい聴こえてくるようでした。多様性が共生するアート展は、どこか居心地がよかったです。

「観て、触れて、感じる」作家と出会ったり、彼らを支える人とお話しできたり、自らが描けたり、つくる体験を通して、心や体や魂が喜んでいると実感した方は少なくなかったと思います。それは、作家さんたちや来場された方々の笑顔から感じました。

出展した作家たちも、彼らを支えている人たちも、準備に関わった実行委員の方々も、観に来た方も、一人一人がかけがえのない大切な存在です。皆様に出会え、ともにつくれたことに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

アート企画部門　顧問　北村雅子
アートコーディネーター　西川直子

ブリッジスクールによせて

ブリッジスクール顧問・トライコース外部講師
石垣　悦子

私がブリッジスクール（以下ブリッジ）に関わらせていただき１年半位たちました。それまでニート状態の若者等の就労支援を行ない、制度の枠にはまらない方々への対応に戸惑いがありましたので、お声かけいただいたときは迷わずお受けしました。

「年齢や障害の有無を問わず一緒になって就労に向け学ぶカリキュラムを作る」と聞いたときは正直「できない」と思いました。でも可能性への壁ってまずは自分がつくるんですね。一人ではできないこともチームで乗り越えられることもたくさんありますね。現在、福祉×教育×起業×企業人×労働の多職種連携で、あらゆる知恵やノウハウを結集しブリッジは運営されています。

今年度のトライコースは２期生13人（うち２人は休学中）を迎え入れています。受け身ではなく“考える力、発信する力”を柱とし挨拶やマナー、グループでの話し合いや発表等、社会で必要なスキルを学ぶカリキュラムが組まれています。

昨年度、修了した一期生はブリッジが開かれる午前、任意で日野春學舎に来て自主学習を継続しています。私が２期生対象午後のカリキュラムに向け〝出勤〟しますと「新たに就職した。敬語の使い方がわからない」「就労先でモチベーションが上がらない」など個別に相談してくださるようになりました。

他者に自分から相談できることは生きていくうえでとても大切だと思います。彼らのこうしたエンパワメントの回復にこれからも真摯に応えたいと思います。そしてブリッジが彼らの居場所にもなっていることが嬉しいです。

８月29・30日は職員様対象にブリッジの案内と研修を行いました。顔の見える関係っていいですね。

参加者の方から「どんな連携ができるか」「利用者にとって必要な科目をチョイスして参加できるようになれば支援の輪が広がるのでは」など意見がでてき、私も勉強になりました。

私たち講師陣は月に２回しか受講者と会いません。だからこそ見える彼らの強みがあるのではと思っています。

「その人らしさを大切に、普段の暮らしを幸せに」を軸にみんなで一緒に手を取り合う、そんな社会づくりの一歩がこのブリッジの魅力ではないかと思っています。

皆さんと一緒に彼らのストレングスをさらに見つけ、伸ばすことができることをこれからも楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

「ブリッジスクール」で得た喜び

元わかば支援学校長
ブリッジスクール副校長・講師
原　まゆみ

教職生活の大部分を、わかば支援学校で元気に生きる子どもたちと共に過ごしてきました。多くの卒業生たちがこの八ヶ岳名水会で、自分らしい暮らしや仕事に励んでいます。私もわかばを卒業し、第二の人生が始まりましたので、自由になった時間を使って現職当時に学びたかった福祉学、心理学、精神医学などをじっくり勉強し、少しずつ社会のお役に立てればと思っていました。

　そんな折、名水会から社会参加につまずく若者を支える学びの場を作るというお話をいただきました。社会への架け橋「ブリッジスクール」。なんて素敵な名前だろうと思わず引き込まれ、講師として運営委員に加わることになりました。受講生は様々な挫折経験によって自信を失い傷ついていましたが、学びの機会を得て仲間と出会い、再び社会参加への意欲を取り戻してくれているようです。そんな若者たちと出会うことができ、私こそ彼らに支えられていると思うこの頃です。ブリッジスクールの意義はとても大きいと思っています。よろしくお願い致します。

▲就労を目指す「トライコース」。
インターネットで実習先の企業やお店を
熱心に下調べする受講生たち。

▲居場所を広げる「つどいコース」。
和やかに散歩やお茶会など、気持ちも身体
もリフレッシュ。

▲「トライコース」。実習先での挨拶やマナー、報告や連絡・相談の「報相連（ほうれんそう）」などをスタッフの演じるロールプレイ（役割演技）でわかりやすく理解。

利用者さんの充実した生活を目指して

北部エリア　ぽーら管理者　**小林　瑞樹**

八ヶ岳名水会にお世話になり、早いもので八年目に入ってしまいました。

現在は、北部グループホームの管理者兼サービス管理に任命され１年間が経ちました。今まで先輩方が行っていた管理という業務の大変さをヒシヒシと感じている今日この頃です。

一年目は星の里での勤務でしたが、そこで学んできたことが今の自分を形成できたと思うことと、原点になっているように感じています。

そんな中で一年間管理業務を行い、現在の課題をいくつか挙げさせて頂きます。

生活支援センター陽だまりの北部エリアの名称は「ぽーら」と言います。

○ぽーらの仕事

・共同生活援助サービス

共同の生活を行う住居において、日常生活での相談支援や入浴、排泄、家事等の援助を行い、地域での自立した生活をする為の支援。

・居宅介護　通院等介護

通院等の移動介助や付き添い。

・地域生活支援事業　移動支援

屋外での移動が困難な方に外出等の支援を行い、地域での自立した生活と社会参加を促進。（通院の送り迎えを含むこともある）

○チーム作りの大変さ・情報共有を行うための工夫

まず、私は２８歳。若いと思います。

今、痛切に感じている事は、チーム作りの大変さ・情報共有を行うための工夫です。チーム内には様々な年齢層の方がおり、様々な意見が生まれ、それをまとめていく力や信頼感に年齢的にも未熟だと思っております。

また、情報共有をし、チーム全体（世話人さんも含む）で一人ひとりの個別支援計画の共有を図るために色々試してみるものの、一部の方が共有できているような状態でした。それは自分の責任であり、工夫のなさだと感じております。

今年度取り組んでいる工夫としては。

・個別支援計画の共有

利用者さんの希望や計画を記入した別紙を用意し夜間体制のあるグループホームへ置いておき説明を含めた情報共有が行えるような工夫。

・ホームミーティングで共有

世話人さんにも個別支援計画の共有を行ってもらうために、ミーティング時に個別支援計画の説明。

・情報共有

会議録（ケース会や委員会）も夜間体制のあるホームに回覧板を設置し、チェックリストも作成し共有。

・チーム作り

会議やヒアリング、日々の中でいろんな話をすると共に去年は世話人さんとの交流会も実施。

・会議

月／２回　ぽーらミーティング、月１回　リーダー会

月／２回　星の里会議、月１回　ホームミーティング

○高齢化に対しての介護技術の向上

・グループホーム内も高齢化が急激に進んでいる状況の中、介護度が高くなっています。その方々を支援して行くにあたって、専門的な知識、技術、もちろん経験も大切になってくると思っています。

また、星の里との連携も行い、緊急時対応の応援、看護師巡回（医療連携体制）と、同時に今後、新たなグループホーム（重度、高齢者対象）設立を視野に、星の里の職員がぽーらの仕事を体験することが始まっています。

○個別支援

人員不足もありますが、支援の質の向上が課題です。今後一人暮らしやサテライト型などへの移行希望がある方などをどんな形で支援をしていくか、個別での継続的な支援が必要になってくると思っています。

こんなところが課題に挙がっていて、人材育成も絡めながら少しずつ課題を解決していけたら、もっと利用している方々の充実した生活へ繋がり、御希望にも応えやすくなっていくような気がします。

ぽーら一同一致団結して頑張っていきたいと切実に思っています。応援宜しくお願いいたします。

グループホーム　ランタン

当法人では、より適切で専門的な支援を行うことで、本人が安心で豊かな生活を送れるようにするため、職員に対して強度行動障害（※注１）支援者養成研修の受講を推進しています。
今回は、その研修を受けてきた２名の職員の感想を紹介させていただきます。

「星の里」生活支援員　千野　貴文

私には、忘れられない記憶がある。夜勤の仮眠中に突然男性利用者に殴られた記憶だ。当時、私を殴った彼は、他傷行為が１日に何回もあり、特に私が夜勤の日は荒れた。そんな彼に私は、強く支持入れをして嫌がる彼を動かし、諭すことしか方法を持っていなかった。当時はそれが良いことだと思っていたし、その方法が全てとすら思っていた。しかし、私が入所施設にいる間に彼が穏やかに過ごせる日は訪れなかった。

それから、10年以上が経った私にある研修を受講する機会が舞い込んできた。それは「強度行動障害支援者養成研修」であり、行動障害を持つ方の支援方法について学ぶ４日間の研修であった。すぐに受講することを決めた。

実際に受講してみると、始めの２日間は、講義と演習から構成される、強度行動障害の定義や発達障害の障害特性、行動障害の持つ意味や機能等を学ぶ基礎研修となっていた。残りの２日間は、基礎研修で得た知識を基にアセスメント（※注２）の仕方、氷山モデル（※注３）等のツールの使い方、個別の障害特性の見分け方、支援手順書の作り方等、行動障害を持つ方の支援方法を具体的に考えられるような実践研修となっていた。

４日間どれをとっても、とても興味深い内容であった。特に私の心に響いたのは、「誠心誠意の関わりだけでは、上手くいくとは限らない。逆に状態をひどくすることもある」という言葉と「行動障害の支援方法は、科学的方法によって根拠を持って作ることができる」という2点であった。10年前の私に教えてやりたいと心底思った。

そして、私は現場に戻ってきた。今は、研修で得た知識を実践することができる立場にいる。実践し現場の仲間に伝える。それが、より多くの行動障害を持つ人達が自分らしく穏やかに暮らしていけることに繋がっていくと期待せずにはいられない。

そして、10年前の私へ「君が今感じている苦悩をそのままにするつもりはない。だから10年後の自分に期待して乗り越えがんばって欲しい」

「春の陽」生活支援員　碓氷　功治

日々障害がある人たちの支援の中で自分たちの経験や感覚だけではうまくいかないことも多く、利用者が何を感じ何を思っているのかわからないことがあります。基礎研修では、行動上問

題を生じやすい自閉症スペクトラム障害（※注４）のある方が抱えている困り感や困難を理解し、感覚の違いや意思疎通の難しさを体験するというものでした。意味の分からない言葉で指示された時の不自由さや感覚を実感することができました。

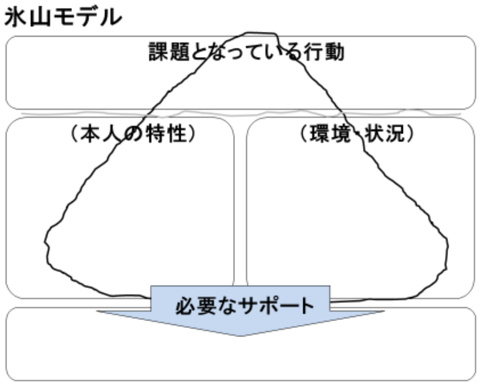
　自分自身の支援を振り返ってみますと、絵カードなどを使い視覚的に支援することもありますが、慣れてくると声掛けの指示が多くなってしまうことがあります。いわゆる問題行動といわれる行為ですが、それは周囲の人間にとっての問題であって、もしかしたら本人にとっては通常のことかもしれません。自分たちも一人ひとり理解の仕方や感じ方が違います。利用者も理解する力はあるのに、不適切な環境や支援によってその可能性を閉ざしてしまっているのかもしれません。

　なぜ言葉ではなく視覚的なアプローチ（絵や写真を使って伝えること）や環境の構造化（物の位置や作業手順を目で見て分かりやすくしておくこと）が必要なのか。これまでの経験からそうした支援の必要性自体は理解していましたが、上司や先輩に教わることで、さらに再確認できた研修でした。

　自閉症スペクトラムを学ぶ上でよく使われる氷山モデルですが、実際どのように活用するものなのか私は知りませんでした。今回の研修では、その氷山モデルを使い、利用者の課題となっている行動に対しての環境や状況を整理し、本人の特性と照らし合わせることで、利用者に対して必要な支援を考えていきました。課題となっている行動を発見することはできますが、その課題が起きてしまった背景を知るためには、その前後の環境・状況・本人の特性を分かっていなければ、必要なサポートを考えることができないことを学びました。

（※注１）強度行動障害とは、環境や関わりの影響により、普通の生活を送るのがとても難しいくらい行動に問題を抱えている状態のことです。

（※注２）アセスメントとは、支援をする前に利用者から話を聞き取り、利用者がどのような人なのかを知るための調査です。



（※注３）表面に現れている事柄は全体のごく一部でしかない氷山になぞらえ、問題行動の背後に隠れている特性や環境にまで踏み込んだ支援を考えるためのモデル。

（※注４）かつては単に自閉症と呼んでいましたが、重い障害から軽い障害まで幅が広く、境目もあいまいなことから、最近では自閉症スペクトラム障害と呼ぶようになっています。

タイの福祉状況について

のはら樂団　浅利美衣

スラム街見学や社会福祉関係施設視察は、日本では見られることではなく、想像を遥かに超えるものでした。言葉では言い表せない環境で、たくましく生きている方たちがいて、とても心を打たれました。人との関わりがとても大切だという事。諦めるのではなく前進。たくさんのことを教えて頂きました。

　スラム街にあるプラティープ財団では、住民票を持ってない子や、学校にも通えない子に、少しでも勉強の場をということで、一日一バーツ学校(塾)を開設されたそうです。設立者の言葉の中に、教育こそが生活を大きく変える原動力になるというお話がありました。学ぶことによって世界が広がるという事です。

利用されている子どもの中には虐待など心に傷を負った子もいます。学校を通して子ども達に大切なのは、カウンセラーよりも、何でも話せる友だちだという事でした。

　障害者施設では、日本との違いにただただ驚くばかりでした。一つのベッドに3～4人の坊主頭の方が横になっていました。最初は男性かと思っていましたが、女性の方でした。50人の利用者をスタッフ2人が48時間体制で支援しなければならないとのことでした。衝撃を受けました。受け入れスタッフの少なさや、利用者の容姿、日本ではあまり見かけない様子でした。

　子どもの保護施設では、6歳までの子どもが保護されて、寮で暮らしていました。自給自足の生活で、鶏やカエルをさばいたり、売ったりしてお金を稼いでいる自給自足の生活でした。誰かに指示されたのではなく、自ら生きる為だと言っていました。そういう行為をしなければ生きていけない。私から見ると過酷な環境にいると感じました。

　カオディーン村で感じたこと、施設見学で学んだこと、日本全国からの福祉業界の方たちと一緒に過ごした時間は、とても充実していました。これから仕事をしていく中で大切なことを学ばせて頂きました。活力としていきたいと思います。

タイ王国視察研修報告
カオディーン村にて

菜の花　平出弘幸

今回のカオディーン村の交流の報告をします。

一日目ですがタイのナコンサワ郡の警察署で村の村長さんがお出迎えしてくれました。村の説明と5年かけて村に老人のディサービスを作るプロジェクトを北岡理事長と一緒にお話しをしました。その後は村の村長宅でお昼ご飯をたべました。始めてのタイの料理でしたのでとても美味しかったです。各ホームステイ先に分かれました。村をゆっくりと歩いたりしたあと、村の田んぼを見せてくれました。

夜には学校で歓迎会をしてくれました、村の子ども達が民族踊りを披露してくれました。

二日目（日本食を食べよう）

村の皆さんに日本食を食べていただこうと学校でおにぎり、カレー、唐揚げを作りました。村の人達に美味しく食べて頂けるように皆さん汗をかきながら頑張って作っていました。12時過ぎにお昼が出来上がりまして村の皆さんにお料理を提供しました。

皆さん美味しそうに食べていて私達もとても嬉しくなりました。

三日目（贈呈式）

サッカーボールの贈呈式を行いました。タイはサッカーが二番目に人気のあるスポーツですので、学校の子ども達に贈呈しました。贈呈式後は村の社会人チームと日本チームでサッカー試合を行いました。皆さんとても楽しんで試合をしていました。結果は日本チームが勝ちました。

夕方には村長さんの自宅で村の伝統の儀式を行い村の人達が手首に白い糸をつけてくれました。この糸をつけていればいつでも村に帰って来れる儀式です。男性は左手に女性は右手につけました。

感　想

今回タイのカオディーン村の研修で思いました事は村全体は一つの家族のように思いました。私が体調を少し崩した時に村の人がすぐに薬を持ってきてくれた事などです。こんなに暖かい村に入れて良かったです。また機会がありましたらタイの研修に行きたいと思いました。

「山梨アール・ブリュット ネットワークセンター」YAN(ヤン)について

企画事業部　瀧澤聰

八ヶ岳名水会は今年度、厚生労働省より「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」を実施する全国10団体の一つとして採択されました。「YAN」は、山梨においてこの事業を推進する「障害者芸術活動支援センター」として当法人が立ち上げた組織で、以下に紹介する5つの活動を事業の柱として取り組んでいます。

「YAN」の活動報告（5つの柱）

① 権利保護・相談

作者の著作権保護や、展示会などへの出展に関する情報を提供するとともに、作家や家族及び支援者が困っていることや分からないことなどを気軽に相談できる機会を作り、必要に応じて弁護士や学芸員等の専門家につなぎます。現在、これまでに寄せられた相談やアンケート結果等の集計を行っています。

② 人材育成のための研修

芸術活動を支える人材を育成するため、障がいのある人の芸術活動の支援に関する研修会を開催します。今年度は、障害者の創作活動を支援するためのアプローチや方法について学ぶ研修会と、商品化と著作権の問題を絡めた研修会を企画しました。県外の先進事業所のスタッフや弁護士等の専門家を講師として招き、参加者との意見交換を深めました。

③ ネットワークづくり

障害者の芸術活動支援につなげるためのアンケートを全県で実施し、県内80ヶ所以上の施設・病院等からご回答いただきました。その結果を元に、作家の調査や相談業務を山梨県全域に展開してネットワークづくりを進めています。また専用のウェブサイトを開設し、イベントや研修会等の情報発信も行っています。

④ 展覧会の開催

今年度7月、県立図書館で「つなぐたゆたうアート展」を開催しました。一昨年度に引き続き2回目の今回は、約1200名の来場者があり、県内外の作品や作家の多様な取り組みについて紹介することができました。年明けには、ニコリにて「生活の中から生まれてくるアート」をテーマに合同企画展（1月21～27日）を開催します。調査によって発掘された作家と作品を取り上げ、創作の背景と思いに迫る展示を計画しています。

⑤ 山梨県との連携

今年度は、山梨県と山梨県障害者支援協会が主催する「第3回山梨障害者芸術・文化祭」と連携して、「アール・ブリュットミニギャラリー」（9月2～3日）を開催しました。映画「アール・ブリュットがうまれるところ」を上映するとともに、映画に出演した作家の作品と山梨県内の作家作品を合同展示しました。アートワークショップも含めて沢山の方にご来場いただき、一般の方々や様々な障害分野の方達との交流が実現できた、貴重な機会となりました。

▲「アール・ブリュットミニギャラリー」展示風景

▲『障害にある人のアート活動＝表現活動から学んだ事』研修風景

菜の花カフェでーす!

〝菜の花カフェ〟はその名のように、菜の花保護者たちが何のしばりもなく集って、コーヒーを飲んで、おしゃべりをして、笑って、しんみりして、一時間半があっという間に過ぎて、「ああ来てよかった!」と思って帰れる場所。子どもたちの状況や家庭の環境など様々であっても、お母さんたちの思いは同じ、その思いを語り共感しあえる場所。ときには子どもたちそっちのけの話題で盛り上がったり。そして廣瀬さんに案内していただく施設見学は貴重な体験で、カフェの楽しみのひとつです。

佐々木美保子

日頃、思い悩んでいる事、ずっと抱え込んできた心の中を吐き出すことで、少し前向きになれる。そんな、仲間たちとのひととき「菜の花カフェ」は、駆け込み寺か!?オアシスか!?「菜の花」のグループホーム設立を切に願って、突き進んでいきたい。

友田　啓子

まったく知り合いのない土地に移住してきて、不安もあったのですが同じ立場で話のできる人、場所ができ、とても感謝しています。

中島　好子

菜の花カフェのお母さんがたとお話し合いができるのがとても嬉しいです。

奥本　道子

ここのところ自分の通院のため菜の花カフェにご一緒できず寂しく思っています。会えば懐かしい方々ばかりで、「そうそう。そうよね。」とか「〇〇してみたらどう?」などと教えを請う場でもあります。また皆さんにお会いし色々教えて頂きたく楽しみにしております。

植松　和子

「こんな世の中で、明日にも何かあったらどうしよう・・・」夫が亡くなり、子供を追いかけられなくなった我が身。つい、親亡き後を考えてしまう今日このごろです。頼るところは「なんとかしてくれるなら〝名水会〟」で、大船に乗らせてもらっていますが、あーもこーもしてやりたいと親バカは死ぬまで続くため、菜の花カフェの皆さんと思いを寄せ合い形にしたいと思うばかりです。

小林　ひとみ

子どもたちの障害はそれぞれ違うが、母親の悩み、苦労話を聞くことにより同感したり、気持ちが楽になったりということがありますね。

木下　良子

菜の花カフェでは子どもたちについての共通した話題や悩みを皆さんと話ができるので毎回参加させていただいています。菜の花カフェから流れて何度かおじゃました、豆の花は、清潔で笑顔が溢れたところで、気持ちよくお食事ができました。菜の花カフェと豆の花、またおじゃまします。

鈴木　美佐子

菜の花カフェはお母さんたちのおしゃべり会に留まらず、可能な限り菜の花職員さんが交代で参加してくださるので、菜の花や名水会全体の話題も沢山伺う事ができます。これまで星の里や、日野春學舎、他に6箇所のグループホームの見学ができたことも大変有意義でした。名水会が一層身近に感じられるようにもなりました。お母さんたちの間にもまとまりができました。時々お父さんたちが参加してくださるのもうれしいです。

北野　恵子

ありがとうございました！

○ 題字を書いてくださった方
星の里支援員　**三井　とし子　様**

○ 表紙のさき織り写真をくださった方
春の陽利用者　**飯野　恵　様**

素敵な字と写真をありがとうございました！

これから開催予定の
「障害者の芸術活動支援モデル事業」
山梨アール・ブリュットネットワークセンター
「YAN」関連アート行事について

合同企画展
「生活の中から生まれてくるアート」
平成二十九年一月二十一日(土)
～一月二十七日(金)
韮崎市交流センターニコリ
地下一階アートギャラリー
宜しくお願いします。

編集後記

日米通算２００勝を達成したプロ野球広島の黒田投手が今季限りで引退した。スポーツ選手の華麗な技やスピードは観る側の驚きや感動を生む。と同時に「言葉の人」と感じるプレーヤーも少なくない。黒田投手もその一人だ。ストレートに絶対の自信を持って挑んだメジャーリーグで、そのストレートが通用しないとみるや、こだわりを捨て、打者の膝元に沈んでいく「ツーシーム」を覚えたそうだ。「打たれるのが怖い。怖いから練習して上達するしかない」「自分の選んだ道が『正解』となるように自分で努力することが大切」。と自著で綴っている。私は深い言葉に感銘を受けたのを覚えている。黒田投手のように、我々はそのこだわりを捨てることができる。一方こだわりを捨てることが出来ずに生き辛さを感じている人たちへの手助けを私たちが決して忘れてはならないこと。「最後の試合、最後の一球という気持ちでマウンドに上がった」ように心を込めて支援したい。人間は挫折と奮起を繰り返しながら、少しずつ階段を上って生きたいもの。それが『人間』。皆おなじなのである。(錦)

社会福祉法人　八ヶ岳名水会

〒408-0031 山梨県北杜市長坂町小荒間 1095-7
電話　0551-32-7355
FAX　0551-32-7350
E メール　hoshinosato@y-meisui.or.jp
ホームページ　http://www.y-meisui.or.jp/

広報委員会スタッフ
錦見祐治　五味真理奈（陽だまり）　廣瀬政光　穂坂雄太（以上菜の花）　相吉謙輔　遠山　萌
浅川恵美（以上星の里）　今井勝仁　篠原　充　中仙道涼子　高柳　優（以上春の陽）　森下　博
浅利美衣　綿鍋潤子（以上のはら樂団）　望月杏沙美（ぽーら）　立川瞳（相談支援）
谷戸道彰（企画事業部）　法人事務局